

あなたと  
もりの、  
ものがたり

A STORY OF  
YOU AND THE FOREST  
IN TOSA-CHO



たかはし ゆうへい まかく  
PRODUCED BY YUHEI TAKAHASHI

まつおか もとひろ さく  
WRITTEN BY MOTOHIRO MATSUOKA

いそのけい え  
ILLUSTRATED BY KEI ISONO

「ピールーリー」

おや、何かなに なが鳴いています。

「ピールーリー」

小さな鳥ちい とり みち まよが、道に迷ってしまったようです。

なんの鳥とりでしょう？

「ねえねえ、太陽たいようさん、ここはどこですか？」

「ここは高知こうちの土佐町とさちょう。ゆたかな水みづと森もりに囲まれたところさ」と

太陽たいようさんが、サンサンおしと教えてくれます。

「ありがとう。僕ぼく、迷子まいごになってしまったみたいなんだ、

おうちもどに戻りたいんだけど」

「それなら、町まちを見渡せる高い所みわた たか ところに行ってみるといいよ」と

太陽たいようさんは言いいました。



ぐんぐんのぼった先には、今まで見たことのないくらい、  
大きな水たまりがありました。

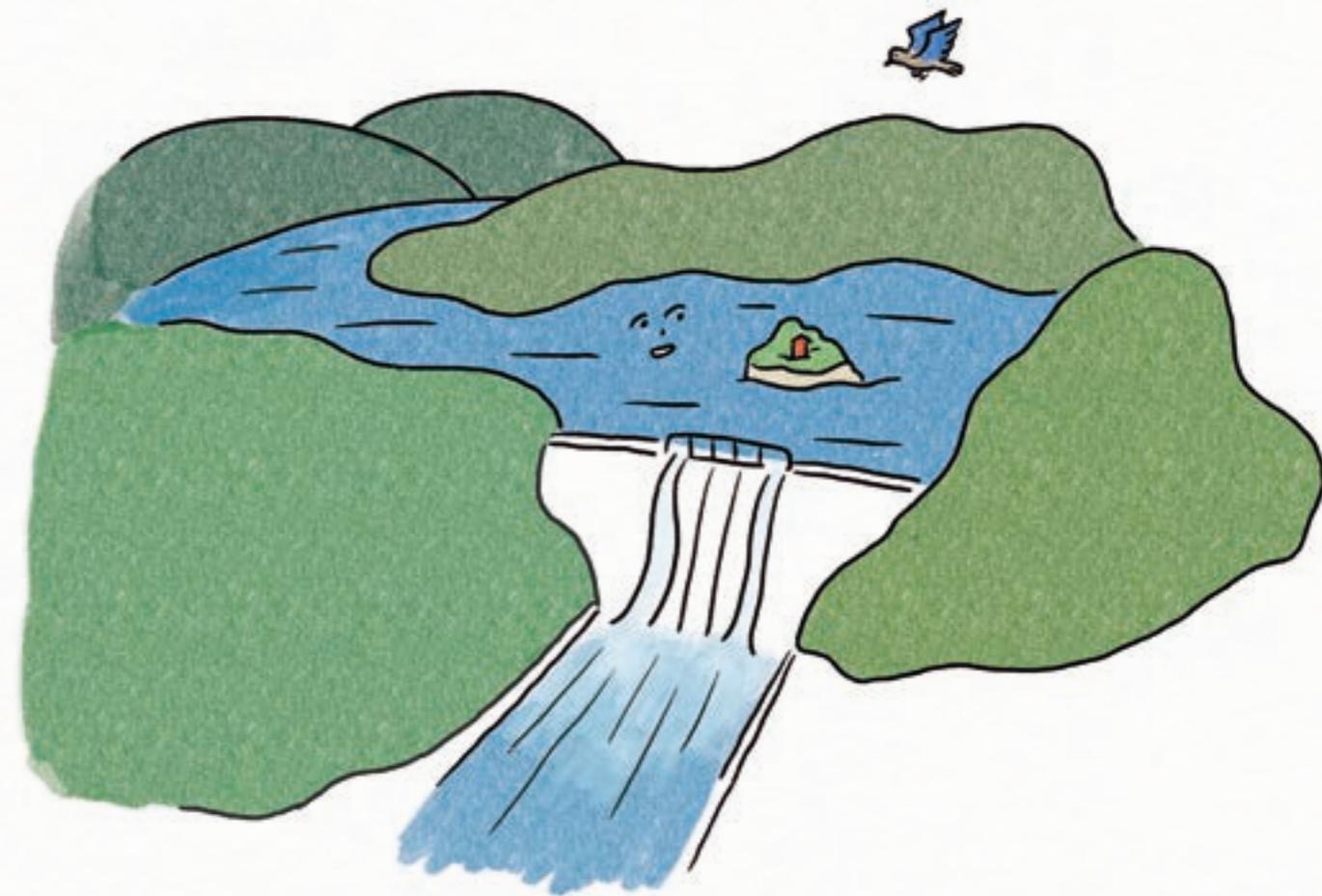
水さんが、話しかけてきました。

「ここは、早明浦ダム。水をたくさん貯めておけるんだ。この水は、  
遠くのまちに住んでいる人たちの飲み水や、お仕事に使われている  
んだよ。ところで君は、どうしてここに来たんだい？」

「お母さんとお父さんと、離れてしまったの。でもここからじゃ  
見つからなそう」と、こどもの鳥は不安そうに、こたえました。

「それは困ったね。君は鳥だろう？もっと森の中を探してみたら？」

水さんは、爽やかに言いました。



とても深い森の中にやってくると、

大きな声が聞こえてきました。

「早くしないと、遅れるぞ！」

声のする方へいってみると、のっぼの木と、

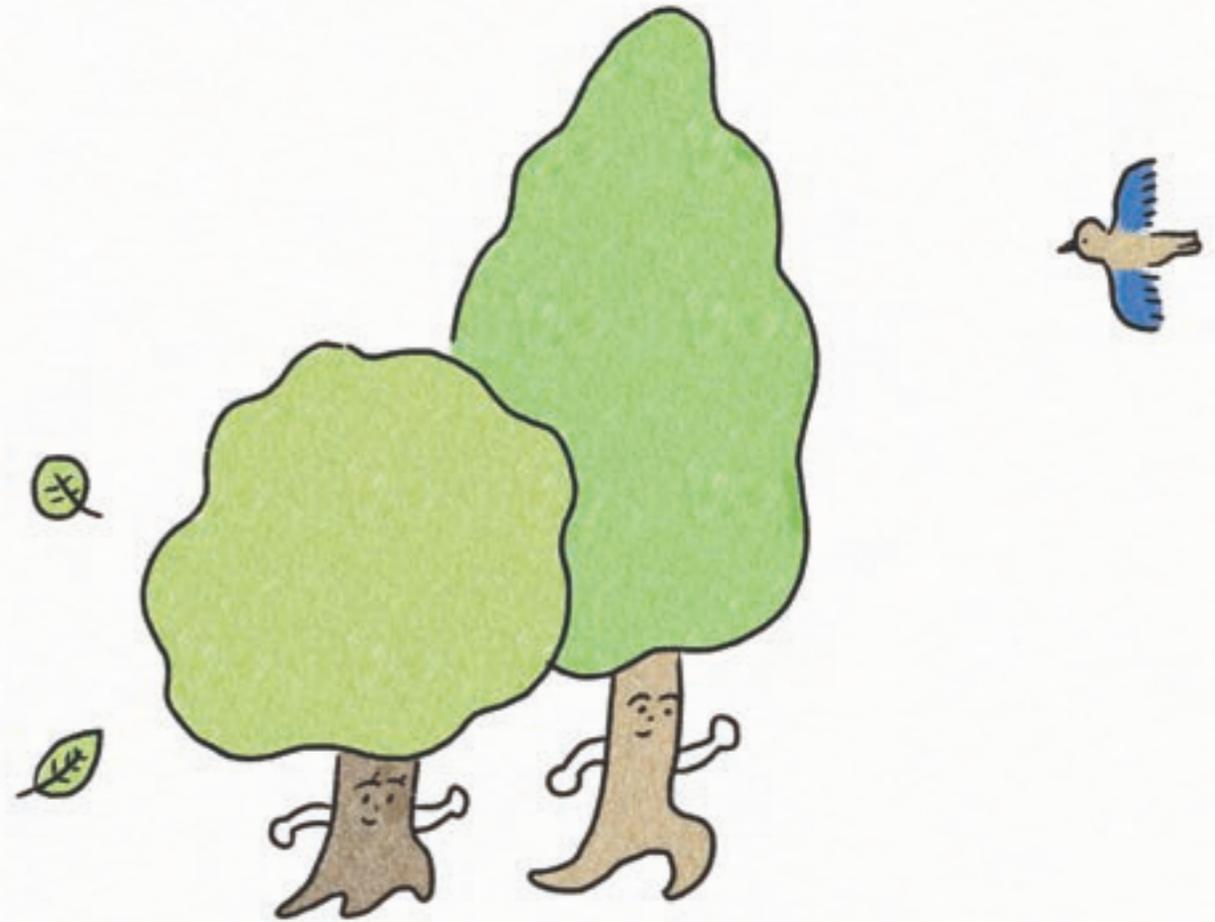
まんまるの木が話しかけてきました。

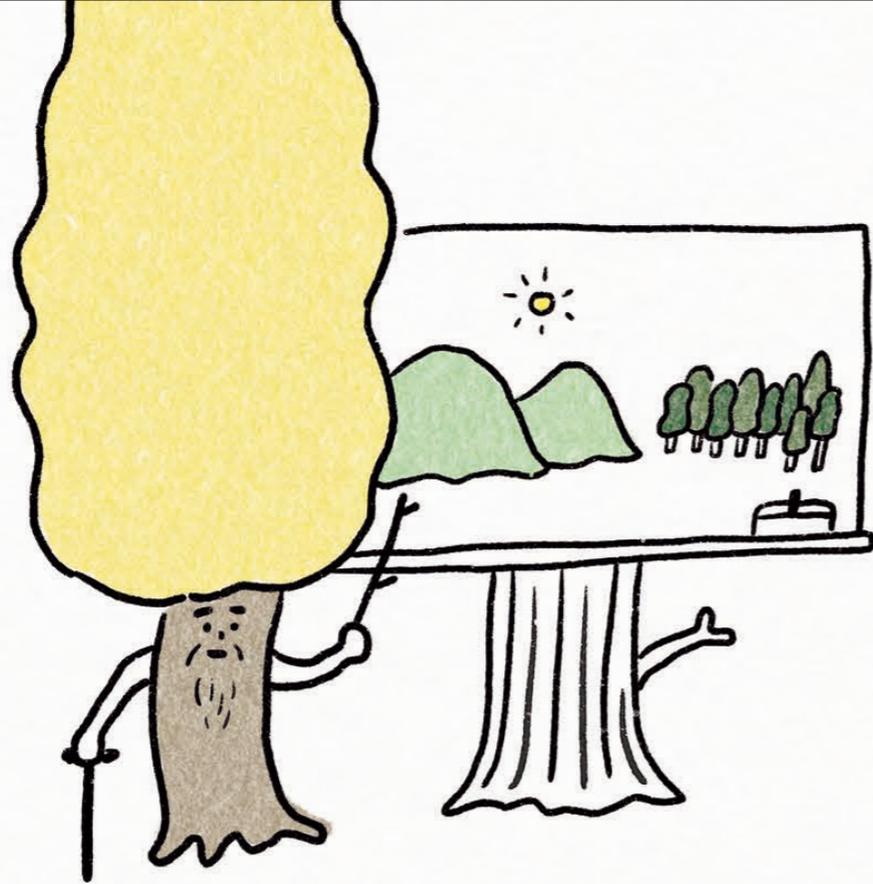
「やぁ！俺は針葉樹、背が高くてかっこいいだろ！

土佐町の森には、俺たちがたくさんいるんだぜ」

「はじめまして！私は広葉樹、丸くて可愛いでしょ？

私たちは、季節の風景をつくっているの。さ、急ぎましょ」





「お〜い、子どもたち。集まっているかの？」

ひときわ立派な木が、しゃがれた声で呼びかけています。

「はい！」と、木や動物のこどもたちが、大きな声でこたえます。



「あれは、森のことを何でも知っているイチヨウの長老先生。

そう、ここは森のことを学ぶ学校なんだ」

針葉樹くんが教えてくれました。





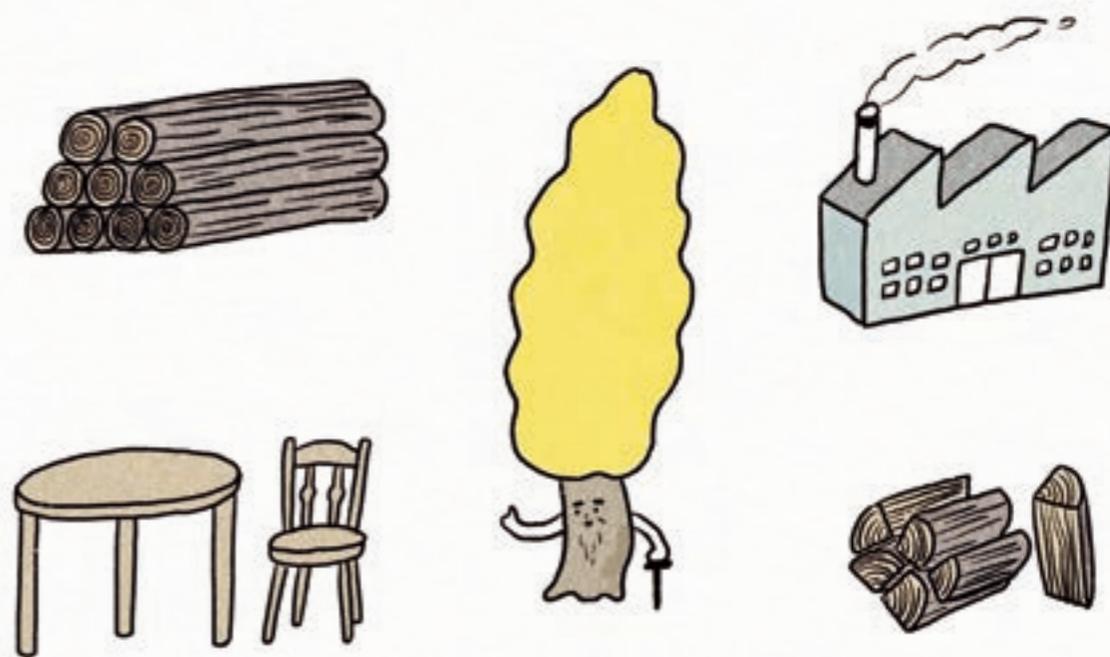
わたし にんげん  
「私は、もっと人間のそばにいたいなあ」

おれ き いえ  
「俺は、カッコいい木の家になりたいぜ！」

にほん き しょうらい ゆめ かた あ  
二本の木は、将来の夢について語り合っています。

「ほお、それは素敵な夢じゃ！長くてまっすぐな木は家の柱に、

かた じょうぶ き かぐ 固くて丈夫な木は、家具をつくるのに向いているからのお」



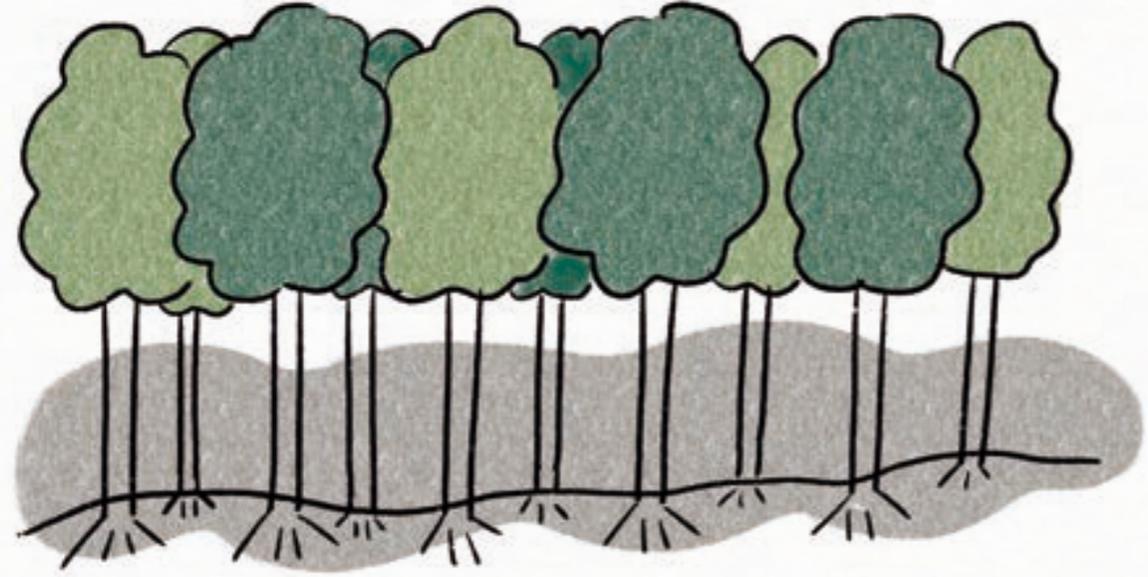
あま き まき も 「余った木は、薪にして燃やしたり、チップになって発電の材料

にんげん く なか き やくだ おお にもなる。人間の暮らしの中で、木が役立つことは多いんじゃ。

き ひごろ つか もり まな ば 木を日頃から使っていれば、森について、学べる場にもなるぞ」

にんげん なかよ 「みんな、人間と仲良しなんだね！」と

とり い うれ こどもの鳥が言うと、みんな嬉しそうにうなずきました。

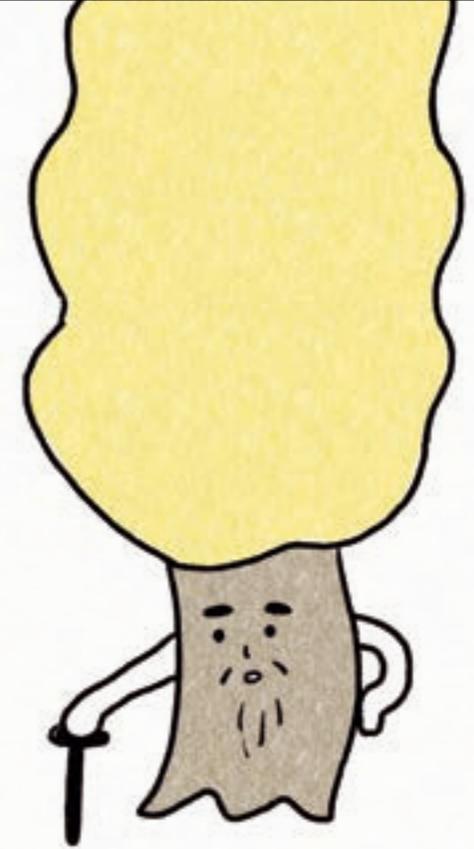


ちやうろうせんせい　む　くら　き　げんき  
「ねえ長老先生、向こうは暗くて、木に元気がないですよ？」

とり　き  
と、こどもの鳥は聞きました。

き　き　こ　あ　たいよう　ひかり　じやうぶん  
「よく気がついたので。木が混み合っているんじゃ。太陽の光が十分に

あ　よわ　つち　なか　みず　た  
当たらず、どんどん弱ってしまった。土の中に水を貯めることもできん…」



とり  
こどもの鳥はびっくりしました。

たいへん　ぼく　なに  
「それは大変！僕にも何かできることはありますか？」

ざんねん　にんげん  
「残念ながら、それができるのは、人間しかいないんじゃよ」

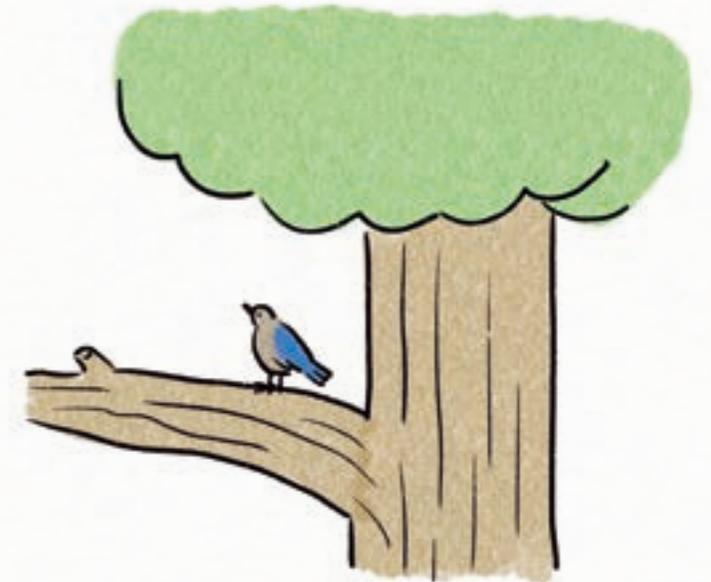
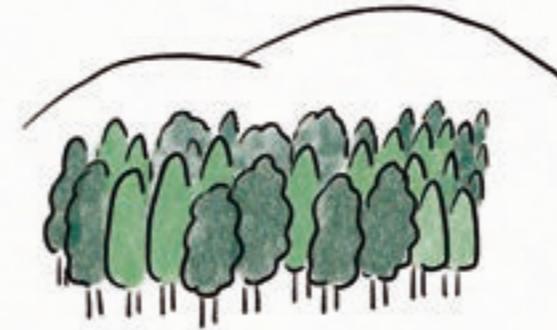
ちやうろうせんせい　した　む　ざんねん　くび　ふ  
長老先生は、下を向いて残念そうに首を振りしました。

わか ころ にんげん せわ  
「ワシがまだ若い頃は、人間たちがせっせと世話してくれたが、  
もり ひと すく もり てい  
森にかかわる人は少なくなりました。森は手入れをしな  
あ  
いと荒れてしまうのじゃ」

とり もり はなし みみ かたむ  
こどもの鳥は、森の話にじっと耳を傾けています。

さいきん にんげん もり たいせつ き  
「それでも最近、人間たちも森の大切さに気がつき、これから  
さき かんが  
先のことを考えてくれているようじゃ。ありがたいのお。  
もり じかん う っ ひつよう  
森は、時間をかけて受け継いでいく必要があるんじゃ」

ぼく だいす もり げんき ほ  
「僕も、大好きな森にはいつまでも元気でいて欲しいな！」  
とり もり なかま  
こどもの鳥は、もうすっかり森の仲間です。



ポタポタ。ポタポタ。

おや、<sup>あめ</sup><sup>ふ</sup>雨が降ってきたようです。

こどもの鳥は、急に家が恋しくなりました。

「お母さんと、お父さんに会いたいなあ」

「大丈夫、私たちが雨よけになるわ」

「俺たちが、土砂崩れを防ぐから安心しな」

広葉樹ちゃんも、針葉樹くんも頼もしいです。

長老先生は、困った様子のこどもの鳥に話しかけます。

「君はどうしてここにおるんじゃ？」

「僕、お父さんとお母さんを探しに森へ来たんです」



「そうか、君はオオルリの子じゃな？」

君のお父さんとお母さんもわしの教え子じゃ。

どこにいるか、森の木たちに聞いてみよう！」

森中の木たちが囁き合って、探してくれています。

すると、広葉樹ちゃんが、嬉しそうに声をあげました。

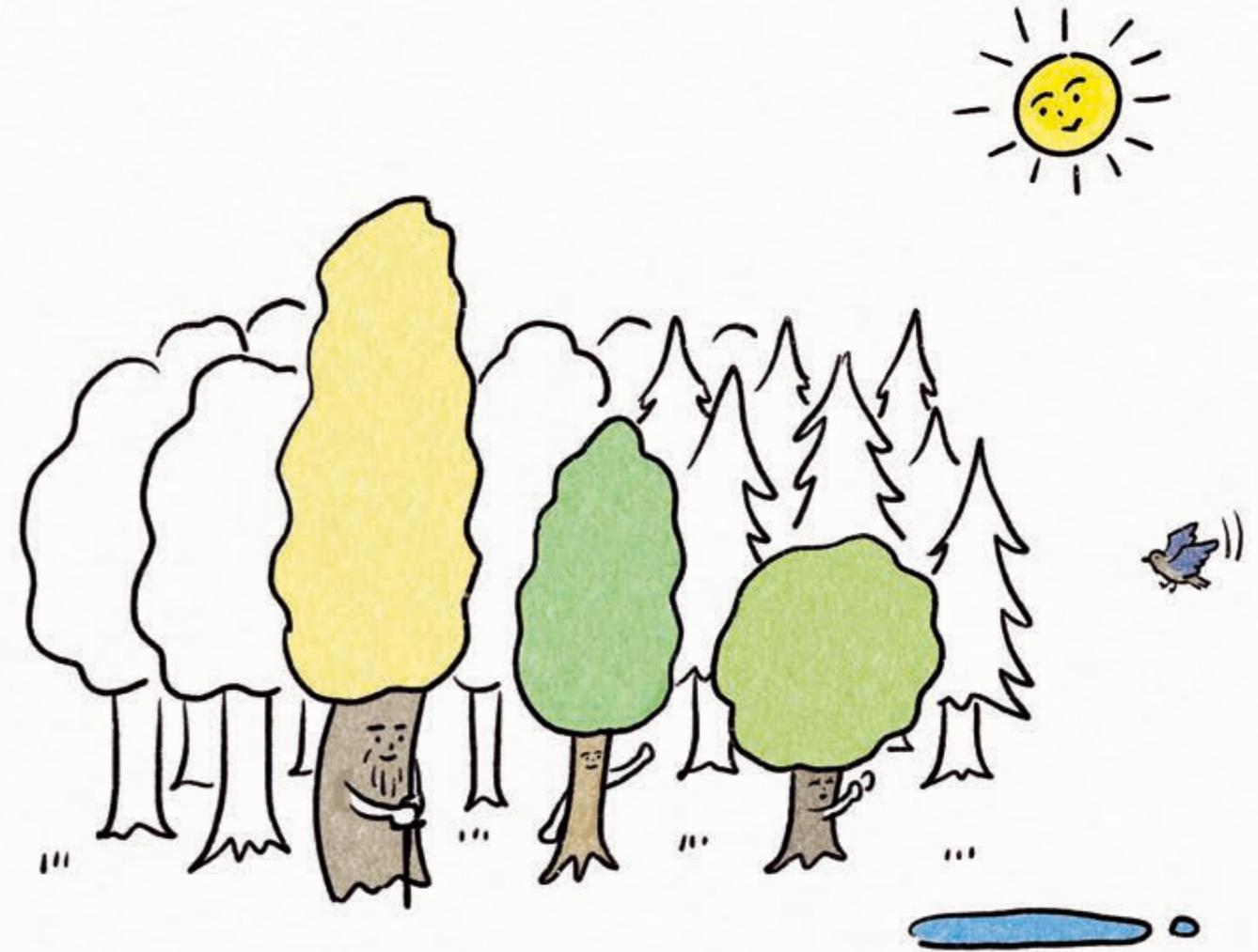
「星の滝で見かけたみたいよ！」

「よかったな！早く帰るんだぜ！」

針葉樹くんが、にっこり笑いました。

「ありがとう、みんな！また来るね！」

こどもの鳥は、元気いっぱい羽を振ります。



ゆたかさの、ずっとそばに。

「水と緑」と「暮らし」が生きる森林

*Tosa Town Forest Vision : Next 50 Years*



ゆたかさって何だろう？

それは、きっとすぐそばにいる。

まるで、空気みたいに。

きれいな水、おいしい食べ物、  
親しい家族や友人、毎日の健康。

普段は、気がつきにくい、  
だけど、とても大切な存在。

森も、その中のひとつ。  
私たちは生まれた時から、  
いつも一緒だった。

森は、雨を飲み水の源として蓄える。  
大雨の時は、土砂崩れから守ってくれる。

森が呼吸をしているから、  
新鮮な空気を吸える。

森は、いつだって、優しい。

私たちは、  
森に優しくできているだろうか。

ゆたかさの、  
ずっとそばにいられるように、  
私たちにできることは、たくさんある。

ほし たき だいす かあ どり  
星の滝には、大好きなお母さん鳥と  
とう どり すがた  
お父さん鳥の姿がありました。

かあ とう  
「お母さ～ん！お父さ～ん！」

ば  
3羽はぎゅっと、くっつきました。

かあ どり やさ こえ  
お母さん鳥は、優しく声をかけました。

まいご しんばい  
「迷子になっていたの？心配したじゃない」

とり まんめん え  
こどもの鳥は、満面の笑みでこたえます。

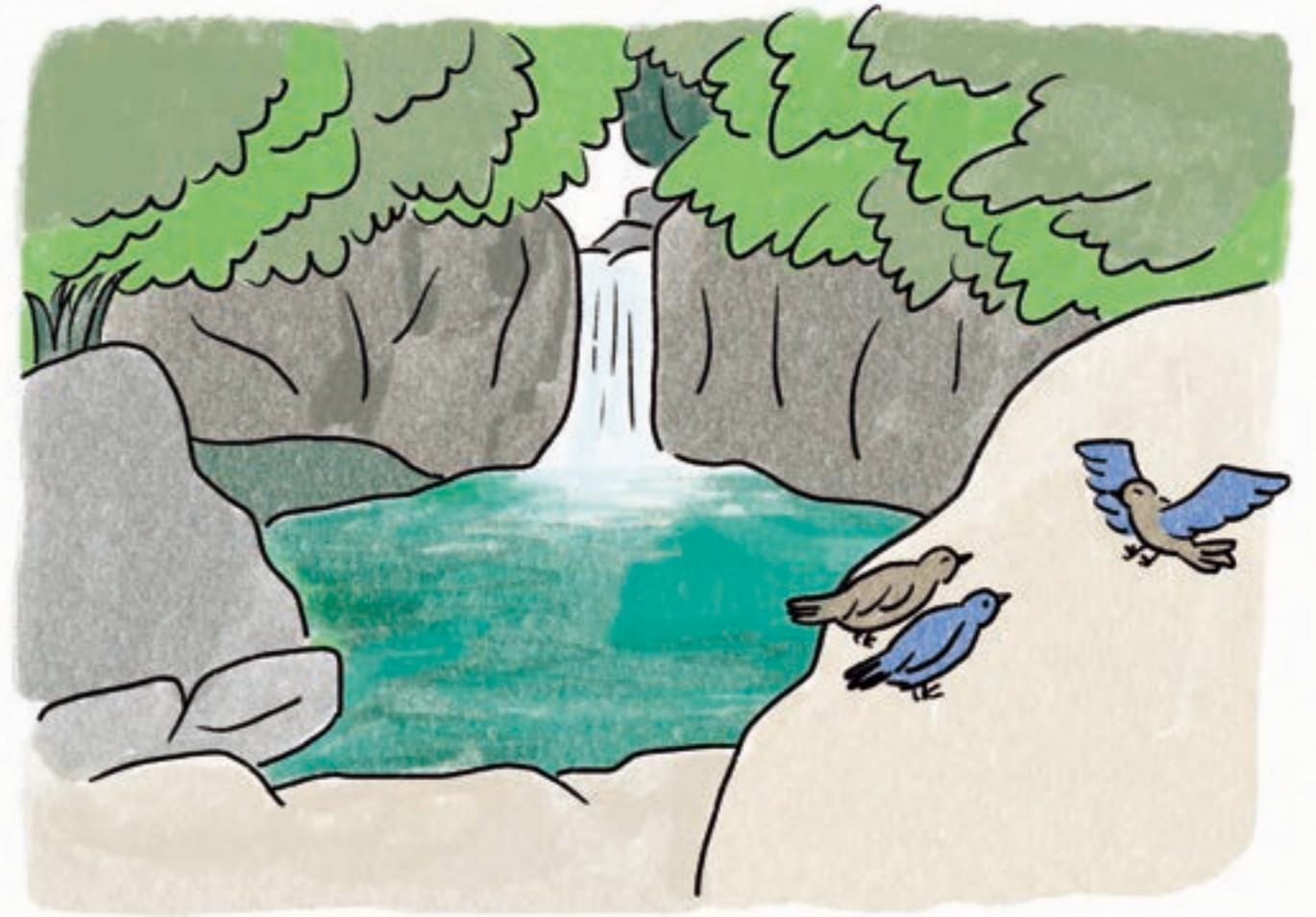
ぼく たの まいご じかん  
「僕、とても楽しい迷子の時間だったよ」

とう どり やさ き  
お父さん鳥も、優しく聞きました。

なに  
「何をしてたんだい？」

ひみつ ぼく もり い たの  
「秘密。でも僕、この森で生きるのが楽しみになったよ」

とり ほこ  
こどもの鳥は、誇らしげです。



それから、いくつかの年月が過ぎました。  
土佐町には、生き生きとした森がひろがり、  
今日もたくさんの仲間が暮らしています。

「ピールーリー」



この絵本を、土佐町のあなたに。



土佐町森林ビジョン（絵本版）

**あなたともりの、ものがたり**

企画 高橋雄平  
作 松岡基弘  
絵 いそのけい

2025年3月1日 発行

発行者 土佐町役場 農畜林振興課  
〒781-3492 高知県土佐郡土佐町土居194  
電話 0887-82-0484

発行所 BLUE AND WHITE DESIGN  
〒781-3521 高知県土佐郡土佐町田井1643

協力 株式会社 エックス都市研究所

本書の無断複製・複写・転載を禁じます。

